

栃木県結核・感染症発生動向調査情報(サーベイランス)

令和7(2025)年2月(週報第5週～第9週(1/27～3/2))集計の感染症発生動向調査情報に関する解析結果は次のとおりです。

1 感染症解析情報 {2月は5週間、1月は4週間、前年同期は5週間での比較となります。}

(1) 定点把握疾病情報

ア. 定点把握疾病のうち、週報疾病(インフルエンザ/COVID-19、小児科、眼科、基幹定点における対象疾病)は 7,607 件(定点あたり 25.91 件/週)でした。1月は 10,843 件(定点あたり 42.75 件/週)でした。

イ. 栃木県において報告が多かった主な疾病は次のとおりです。

疾病名	報告数	前月との比較(週あたり比)	前年同期との比較(週あたり比)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)	2,520 件 (週あたり平均 504.00 件)	 (0.76 倍) 前月は 2,473 件 (週あたり平均 618.25 件)	 (0.47 倍) 前年同月は 5,403 件 (週あたり平均 1080.03 件)
インフルエンザ	1,932 件 (週あたり平均 386.40 件)	 (0.20 倍) 前月は 6,907 件 (週あたり平均 1726.75 件)	 (0.40 倍) 前年同月は 4,810 件 (週あたり平均 962.00 件)
感染性胃腸炎	1,749 件 (週あたり平均 349.80 件)	 (2.74 倍) 前月は 503 件 (週あたり平均 125.75 件)	 (2.09 倍) 前年同月は 838 件 (週あたり平均 167.60 件)

- ① 新型コロナウイルス感染症は、前月に比べ報告数が 0.76 倍とやや低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 0.47 倍と大幅に低い水準で推移しています。
- ② インフルエンザは、前月に比べ報告数が 0.20 倍と大幅に低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 0.40 倍と大幅に低い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、ほぼ同様の水準で推移しています。
- ③ 感染性胃腸炎は、前月に比べ報告数が 2.74 倍と大幅に高い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 2.09 倍と大幅に高い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、やや高い水準で推移しています。

(2) 全数(1～5 類)把握疾病情報

ア. 1 類、2 類、3 類疾病及び新型インフルエンザ等感染症(全国)

結核 1,275 件(1月 784 件)、コレラ3件(1月0件)、細菌性赤痢5件(1月1件)、腸管出血性大腸菌感染症 115 件(1月 119 件)、腸チフス1件(1月3件)の報告がありました。

イ. 4 類・5 類(上位 6 疾病)(全国)

順位	疾患名	件数	前月件数
1	百日咳	1,752	619
2	梅毒	1,238	904
3	侵襲性肺炎球菌感染症	324	596
4	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	179	130
5	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	150	165
6	レジオネラ症	141	134

ウ. 栃木県では次の報告がありました。(計 68 件)(1月 60 件)

結核 10 件、レジオネラ症 5 件、アメーバ赤痢 1 件、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 2 件、急性脳炎 1 件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 4 件、後天性免疫不全症候群 1 件、侵襲性肺炎球菌感染症 4 件、梅毒 15 件、播種性クリプトコックス症 1 件、百日咳 24 件

※本解析評価は、速報性を重視しておりますので、今後の調査などの結果に応じて、若干の変更が生じることがあります。

2 疾病の予防解説（百日咳）

小児を中心に見られますが、近年では成人の症例も多く報告されています。

乳児では重症化しやすく、特に生後6ヶ月以下では死に至ることもあるため注意が必要です。

県内では昨年1年間に12件の報告がありましたが、今年は既に31件の報告があり、特に県北地区で増えています。今後の発生動向に注意するとともに、手洗いや咳エチケット等の一般的な感染対策を心がけましょう。

疾病名	百日咳
原因	病原体は百日咳菌です。
感染経路	感染経路は飛沫感染や接触感染です。
症状	<p>7日～10日間程度の潜伏期間を経たのち、カタル期→痙咳期→回復期の3つの経過をたどります。始めの症状から完全に回復するまでに2～3か月かかります。</p> <p>【カタル期】 約2週間 鼻水やくしゃみなどの普通のかぜの症状から始まり、次第に咳の回数が増え激しくなります。排菌量が多く、周囲への感染力が最も強い時期です。</p> <p>【痙咳期】 約2～3週間 百日咳特有の発作性けいれん性の咳（痙咳）が見られます。 コンコンコンコンコンといった連続性の咳に続いて、息を吸うときに笛の音のような「ヒュー」という音が聞こえます。痙咳発作は夜間に多く、しばしば嘔吐を伴います。息を詰めて咳をするため、顔のむくみや結膜の充血、鼻血が見られることもあります。 ただし、乳児では特徴的な咳が見られず、単に息を止めているような無呼吸発作からチアノーゼ（手足の先や唇などの皮膚や粘膜が青紫色になる状態）、けいれん、呼吸停止と進展することがあります。合併症としては、肺炎や脳症などがあります。</p> <p>【回復期】 激しい発作は次第に弱くなり、2～3週間でみられなくなりますが、急にぶり返すことがあります。</p> <p>成人の百日咳では咳が長期にわたって持続しますが、上に記載したような典型的な発作性の咳を示すことはなく、やがて回復に向かいます。そのため、百日咳と気づかずに感染を拡げてしまう危険性があります。咳等の呼吸器症状がある時は、マスクを着用し、重症化しやすい新生児や乳児との接触をできるだけ避けましょう。</p>
予防対策	五種混合ワクチン（ジフテリア、破傷風、百日咳、ポリオ、ヒブの混合ワクチン）が定期予防接種となっています。乳児が百日咳に感染すると重症化しやすいため、接種可能月齢になったらできるだけ早めに予防接種を受けましょう。また、飛沫・接触感染予防として、手洗いや咳エチケット等の一般的な感染対策を心がけましょう。

（疾病の予防解説 参考）

国立感染症研究所 HP <https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ha/pertussis.html>

厚生労働省 HP https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekakaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/dpt-jpv-hib/index.html

※予防解説は一般的なことを記載していますので、不明な点は主治医によく相談するようにしましょう。

3 その他の参考事項

国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムにより、2月に県内で警報および注意報が発令された感染症は次のとおりです。

	第5週 (1/27～2/2)	第6週 (2/3～2/9)	第7週 (2/10～2/16)	第8週 (2/17～2/23)	第9週 (2/24～3/2)
インフルエンザ	【警報】宇都宮				
伝染性紅斑	【警報】宇都宮・ 県南・安足・県全体	【警報】宇都宮・ 県南・安足・県全体	【警報】宇都宮・ 安足・県全体	【警報】 宇都宮・安足	【警報】 宇都宮・安足
流行性角結膜炎	【警報】県東	【警報】県東	【警報】県東	【警報】県東	【警報】県東

※国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムは、過去の週ごと・保健所ごとの届出数に基づき、届出数が特に多いとき（およそ上位1%以内）に警報が発生されるよう、疾病ごとに定点当たりの基準値が定められたものです。